

鹿児島県におけるスポーツツーリズムに関する事例研究

—サッカーイベントに着目して—

深田 忠徳*

Abstract

The purpose of this study is to clarify the actual situation of sports tourism in Kagoshima Prefecture. In particular, this study focused on soccer events. The target of the study was the “JFA All Japan U-12 Soccer Championship” and “Sports Training Camp in Tarumi City”.

From the two survey cases, it became clear that Kagoshima Prefecture has an optimal environment for hosting sporting events, and that the regions in Kagoshima Prefecture are making distinctive efforts to attract sporting events.

1. はじめに

鹿児島県は、環境整備されたスポーツ施設を多数有しており、県外からも多くの人々が訪問する。2019（令和元）年度（平成31年4月～令和2年3月）、鹿児島県内でスポーツキャンプ・合宿を行った県外者は、延べ160,572名（前年度比5.3%増、8,036名増）、団体数は2,168団体（前年度比65.7%増、860団体増）と過去最高の記録を更新した（鹿児島県文化スポーツ局スポーツ振興課、2020）。種目別では、「サッカー」が最も多く、延べ23,089名（全体の14.4%）が訪れている（鹿児島県文化スポーツ局スポーツ振興課、2020）。2020（令和2）年1月から3月は、新型コロナウイルス感染流行の影響もあり、春休み期間におけるスポーツキャンプ・合宿の実施数は例年より減少したと考えられる。しかしながら、「南部九州総体2019」（全国高等学校総合体育大会）の体操、卓球、柔道、バスケットボール、フェンシング、カヌーの6競技が鹿児島地域を中心とした開催であったことなどが影響して、例年を上回る実績となった。鹿児島県でのスポーツキャンプ・合宿は、年々増加傾向にあり、スポーツ施設の拡充・整備や自治体の誘致活動及び鹿児島特有の温暖な気候などの要素が、参加者増加につながっていると考えられる。

そうした状況を踏まえ、本研究では、鹿児島県のスポーツツーリズムに着目して、鹿児島県で開催されるスポーツイベントやスポーツ合宿の実態について明らかにすることを目的とする。具体的には、JFA全日本U-12サッカー選手権大会についての状況と垂水市におけるスポーツ合宿（サッカー競技）を事例に鹿児島県におけるスポーツツーリズムについて分析していく。

キーワード：観光、サッカー環境、スポーツ施設、スポーツ誘致

* 本学福祉社会学部准教授

2. 日本におけるスポーツツーリズムの動向

2011（平成23）年、観光庁（国土交通省）は、「スポーツツーリズム推進基本方針～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」を打ち出し、我が国のスポーツ観光推進に向けた具体的な取り組みを示した。ここでは、主として、次の3点について示されている。「1. スポーツとツーリズムの融合で目指すべき姿」として、スポーツを通じた新しい旅行の魅力を創出、地域観光資源の顕在化、訪日・国内旅行の活性化を図ること。「2. スポーツツーリズムに期待する効果」として、インバウンド拡大、スポーツ振興、健康増進、産業復興などの幅広い効果が期待できること。「3. スポーツを活用した観光まちづくり」として、地方公共団体や競技団体間での連携・協働による大会・合宿誘致やプロスポーツ誘致を介して観光まちづくりを創出していくこと（観光庁、2011）。こうした「スポーツツーリズム推進基本方針」（2011年）を基に我が国におけるスポーツツーリズムが展開されていくことになるが、スポーツツーリズム推進に向けたその他の動向にも着目したい。

我が国では、2012（平成24）年4月に、一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構が設立された。そして、2015（平成27）年には、スポーツ庁が設置され、その翌年の2016（平成28）年3月には、「スポーツ庁・文化庁・観光庁」の包括連携協定の締結がされたことで、行政レベルにおいてのスポーツと観光の融合がより緊密なものとなっていく。さらに、2017（平成29）年3月には、スポーツ庁が「第2期スポーツ基本計画」を策定したが、そのなかではスポーツを通じた地域活性化の具体的施策として「スポーツツーリズム」が盛り込まれた（スポーツ庁、2017）。

スポーツツーリズムの観点から、人々とスポーツとの関係性をみれば、まず、「するスポーツ」として、各競技団体がチーム強化を目的としたスポーツ合宿の実施やスポーツ大会・フェスティバル等への参加などがある。また、各地域の山岳資源を活用したトレッキングやトレイルランニング、海洋スポーツとしてのサーフィン、シーカヤック、パドルボードなどの活動（海洋資源）がある。次に、「みるスポーツ」として、ビッグスポーツイベント（世界選手権・ワールドカップなど）へのスポーツ観戦がある。2019（令和元）年に日本で開催されたラグビーワールドカップ2019日本大会では、多くの外国人観戦者が訪れた。そのラグビーワールドカップの試合観戦を行った訪日外国人旅行者の訪日旅行支出額は、一人当たり「平均38.5万円」で、その額は通常の2.4倍であったことはたいへん興味深い（観光庁、2020）。日本で開催されるビッグスポーツイベントの観戦のために、世界中の外国人観光客が来日することに伴うインバウンド効果は絶大であるといえる。こうした状況を背景に、日本の経済界からは、TOKYO2020オリンピック・パラリンピックに多くの期待が寄せられていた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で外国人のみならず日本人も含めて大会は「無観客」での開催が決定した。観光業・運輸業において、その経済的損失は計り知れないであろう。他方、日本国内では、地域のスポーツイベントへの参加者や全国大会等に参加するチームやプレーヤーの関係者ら（学校関係者、保護者、選手の家族など）のスポーツ観戦がある。さらには、「ささえるスポーツ」として、競技大会へのボランティアやスポーツイベントに対するサポート活動、そうした大会やイベントの企画・立案などの活動もある。例えば、「鹿児島マラソン2019」（新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年中止、2021年中止・オンライン開催）では、フルマラソンとファンマラソン（8.9km）を合わせた大会参加者が12,523名（南日本新聞、2019年3月12日朝刊）で、大会ボランティアには過去最多の約3,997名が登録した（南日本新聞、2019年2月24日別冊）。大会参加者には、完走を目指して日々のランニングを継続的に実践してきた者もいたであろう。そうした活動は、自己目的を追求する機会としての「生きがい」づくりになるとともに健康増進へ向けた取り組みにもなる。また、ボランティア参加者は、大会参加者をサポートすることで地元への愛着を醸成するとともに県外参加者との交流を図ることができる。また、2019大会では、海外からのエントリーランナー（500名以上）へのサ

ポートとして、「外国人おもてなしボランティア」の留学生約30名が活躍した（南日本新聞、2019年3月4日朝刊）。大会ボランティアのサポートがスポーツイベントをいっそう魅力あるイベントへと変容させるのである。

スポーツツーリズムによる人々のスポーツとの関わりは多様であり、それぞれに享受の仕方があると考えられる。そうしたなかで、スポーツツーリズムによる地域活性化には、大きな期待が持てる。村田は、スポーツツーリズムによる地域活性化とは、「当事者によって認識された空間において、そこに暮らす住民と観光者双方の期待を実現するために、各種地域次元の連携・融合から各々の価値内容を運動させ、相乗的付加価値をもたらすプロセス」であると示唆する（村田、2018）。スポーツイベントによって地域に内在するスポーツに関する物的資源・人的資源・自然資源を複合的に活用することで、地域住民と観光者（大会参加者や選手、それに付随する関係者）がともにイベントを享受できる環境づくりが重要であるといえる。そうした点を踏まえながら、本稿では、「JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会」及び「垂水市におけるサッカー合宿」の事例から鹿児島県におけるスポーツツーリズムについて考察する。

3. 鹿児島県におけるスポーツ大会及びスポーツ合宿の事例

（1）JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会

「JFA 全日本 U-12サッカー選手権大会」¹が鹿児島開催となり6年間で終了した。2014（平成26）年の「第38回全日本少年サッカー大会（競技期間：2014年8月4日（月）～8月9日（土）」までは、4年間静岡県（会場：御殿場高原時之栖裾野グラウンド、愛鷹広域公園多目的競技場）で開催された。真夏の炎天下において、数日間にわたる連戦は、選手たちの疲労を極限状態に至らせ、極度のパフォーマンス低下をもたらしたであろう。2014（平成26）年の静岡県開催から2015（平成27）年に鹿児島開催へと移行し、同時に8月開催から12月開催へと移行した²。全日本 U-12サッカー選手権大会の鹿児島開催は、当初1期3年計画（2015年～2017年）であったとされる。しかしながら、2期目に入り、さらには3～4期目：第45回大会（2021年）から第50回大会（2026年）までの期間を鹿児島県が主管県として開催することが決定した（日本サッカー協会、2021年7月16日通知）。全国大会の12年間連続開催に至るその背景には、鹿児島県が優れた環境を有しているからに他ならない。

九州南部地方である鹿児島は、「温暖な気候」で、サッカー競技に限らずその他のスポーツ活動においても最適な環境であるといえる。全日本 U-12サッカー選手権大会は、8月から12月開催へと移行したことにより暑さ対策はできたが、次には寒冷の問題が生じてくる。その点について、鹿児島では降雪することがほとんどなく、他地域に比べ12月でも温暖であるという特長がある。また、「スポーツ施設（サッカーグラウンド）」についても環境が整っているといえる。全日本 U-12サッカー選手権大会には、「天然芝」のサッカーグラウンドが必須とされる。1次ラウンド（予選リーグ）の会場となる「鹿児島ふれあいスポーツランド」「鹿児島県立サッカー・ラグビー場」には、ジュニアサッカー規定サイズで各4コート、合計8コート分の天然芝グラウンドが設営できる。また、ウォーミングアップ会場として正規サイズの人工芝グラウンドが設置されていることもメリットの一つである。さらに、決勝トーナメントで使用する「白波スタジアム（鹿児島県立鴨池陸上競技場）」「鹿児島県立鴨池補助競技場」も質の高い天然芝グラウンドである。大会会場となるすべてのグラウンドの天然芝は日頃より管理されており、良好な状態が保たれている。

1 「JFA 全日本 U-12サッカー選手権大会」は、2017（平成29）年に開催された「第41回全日本少年サッカー大会」を最後に、2018（平成30）年の第42回大会から名称変更となった。日本サッカー協会のブランディング事業の一環として、大会名の前に「JFA」を記すことで統一することとなり、名称変更に至った（日本サッカー協会、2017）。

2 8月から12月開催は、選手のコンディションへの配慮もあるが、公式戦を延長したことにより、8月の早期引退者を防ぎ、継続的な育成強化の期間を維持するねらいも考えられる。

「白波スタジアム」は、鹿児島ユナイテッドのホームグラウンドであり、「鹿児島県立鴨池補助競技場」「鹿児島ふれあいスポーツランド」「鹿児島県立サッカー・ラグビー場」には、Jリーグチームが毎年1・2月にシーズン前のキャンプ地として訪れている。すなわち、鹿児島には、全国の地域予選を勝ち抜いた選手たちがトップレベルのパフォーマンスを発揮することに最適なグラウンドが整備されているということだ。さらに、観光地である鹿児島市には、「宿泊施設」も多数あり、全国から選手やその関係者が訪れても宿泊施設が不足することはない。そして、「鹿児島の食文化」についても触れておかなければならない。鹿児島県には、「かごしま黒毛和牛」「かごしま黒豚」「黒さつま鶏」といった全国的にもブランド力のある食材を中心に、新鮮野菜や鹿児島近海で獲れる活魚など、鹿児島はまさに食の宝庫といえる。また、県内各地の蔵が独自の手法で丁寧に作り上げる「焼酎」は、そうした食材の魅力をよりいっそう引き立ててくれる。鹿児島の美味で栄養価の高い食事は、選手のモチベーションやパフォーマンスを高めてくれることに作用する。さらに、鹿児島県内の各地に湧き出る「温泉」は、サッカーの試合に全力でプレイした選手や熱のこもった応援を繰り返した観戦者らの疲れを癒してくれる。

このように鹿児島にはスポーツ観光地として、「優れたスポーツ施設」「多くの宿泊施設」「温暖な気候」「食文化」「豊富な温泉」と全国でもトップクラスの環境が整備されており、スポーツツーリズムの観点からすれば、鹿児島は魅力満載の地域であるということが理解できる。

2020年12月に開催された「JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会」は、新型コロナウイルス感染症に対する徹底した予防策を講じたなかで大会が開催された。その大会では、全国各地から地区予選大会を勝ち抜いたチームの選手やスタッフとその保護者ら多くの大会関係者が鹿児島に訪れた。表1は、大会期間に会場に設置された入場ゲート³を通過した人々の人数を示している。

表1 大会来場者数（ゲート通過人数）

	12/26 (土)	12/27 (日)	12/28 (月)				12/29 (火)	計
	ふれあいスポーツランド		ふれスポ	鴨池補助	白波スタジアム		白波スタジアム	
	1次ラウンド	1次R/R16	フレンドリーカップ	準々決勝	準決勝①	準決勝②	決勝	
来場者	2,666	2,468	849	600	850	1,024	1,465	9,922

（「JFA 第44回全日本U-12サッカー選手権大会総括報告書」を基に筆者作成）

コロナ過でありながらも、大会初日から、約2,600名の人々が来場している。この来場者に加えて、チームの選手・スタッフを合わせて約970名、大会運営スタッフ約70名に審判、日本サッカー協会テクニカル部門、各県サッカー協会、メディア、協賛社、店舗・プロモーションスタッフ、鹿児島県・鹿児島市といった多くの大会関係者が来場する。12月26日から12月29日までの4日間の期間で、延べ13,974名と多くの来場者があった（日本サッカー協会 JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会事務局，2021）。前年度の第43回大会の来場者合計延べ数19,567名からすると来場者の減少がみられるが、今回の大会には、新型コロナウイルス予防の観点から例年大会前日に執り行われる「開会式」が実施されなかったことや、大会関係者も含めて、コロナ流行の影響によって来場を控えた人々がいたからだと考えられる。それでも、延べ13,974名の来場者数は、大会規模の大きさを示しており、本大会への関心の高さがうかがえる。

大会開催にあたって、鹿児島へ多くの方が訪れることで、経済的な面でのメリットもある。表2は、直近3大会における「大会参加者の一人当たりの消費予定額」を示している。

3 大会では、新型コロナウイルス対策として、一般来場者には会場入場の際に入口ゲートを設けて、そこで体温チェック手指アルコール消毒を徹底し、健康が確認された方には、「チェック済み」を証明するシールを張り付けて来場するという感染予防策を講じていた。

表2 大会参加者における一人当たりの消費予定額

(単位：円)

年度	大会名	交通費	宿泊費	飲食費	お土産購入費	観光地入場料	計
2018年度	第42回全日本U-12サッカー選手権大会	7,259	30,166	18,721	12,727	4,169	73,042
2019年度	第43回全日本U-12サッカー選手権大会	16,333	44,673	23,340	16,876	8,691	109,913
2020年度	第44回全日本U-12サッカー選手権大会	11,708	56,421	25,793	17,887	7,138	118,947

(鹿児島県サッカー協会からの提供資料を基に筆者作成)

表3 大会参加者全体の消費予定額

(単位：円)

年度	大会名	参加者数	全体の消費予定額
			一人当たり平均消費額×参加者数
2018年度	第42回全日本U-12サッカー選手権大会	2,300	167,996,600
2019年度	第43回全日本U-12サッカー選手権大会	2,300	252,799,900
2020年度	第44回全日本U-12サッカー選手権大会	2,300	273,578,100

(鹿児島県サッカー協会からの提供資料を基に筆者作成)

データによれば、大会参加者の一人当たりの消費予定額は年々上昇傾向にあり、2020年の第44回大会では、一人当たり118,947円と算出されている。例年ならば、大会期間中には鹿児島の観光地を訪れるチームが散見されるが、2020年は新型コロナウイルス流行の影響により「観光地入場料」が減額となっている。しかしながら、一人当たり約10万円を超える消費行動により、第44回大会の参加者全体の消費予定額は、「2億7357万8100円」(表3)と算出されており、コロナ禍で経済活動が停滞した鹿児島にとって、本大会の開催は経済的な面で大きな効果をもたらしたといえる。しかしながら、海老塚(2019)が「スポーツイベントは経済波及効果などその価値が数値化されることが多いが、スポーツそのものは、多くの人が分かち合えることが本来の価値ではないだろうか」と示唆するように、スポーツイベント開催の意義は、開催地域に対する経済波及効果に加えて、そのイベントへの参加者および受け入れ側の地域住民が、スポーツイベントを通して、互いに相互作用しながら、そのイベントに付随する多くの喜びを享受していくことにある。そのことが、スポーツが有する「本来的な価値」を高めていくことにつながっていく。

上述したとおり、「JFA 全日本U-12サッカー選手権大会」の鹿児島開催は、第50回大会(2026年)まで、鹿児島開催が決定している。これまでの6大会開催の実績を踏まえつつ、今後も参加者と地元住民とのさ

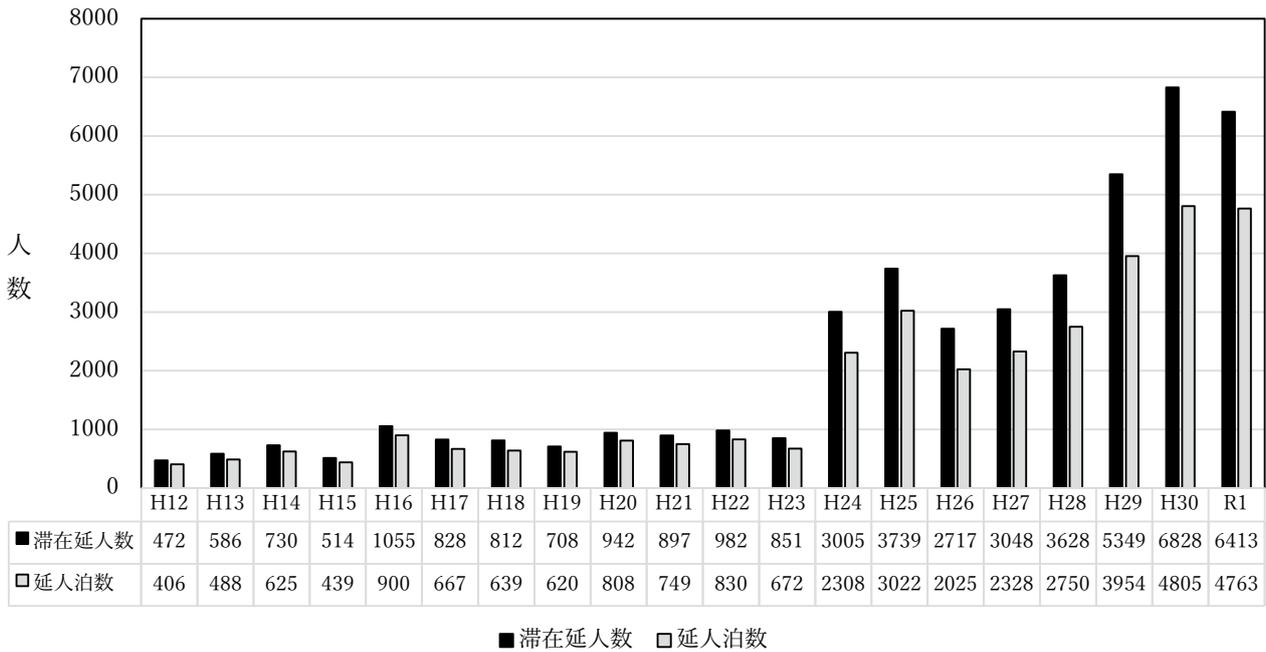
らなる結び付きを深めながら、互いの「相乗的付加価値」を高めていくための取り組みが求められよう。

(2) 垂水市におけるスポーツ合宿

①垂水市スポーツ合宿の状況

鹿児島県大隅半島に位置する垂水市には、例年多くのスポーツ団体がスポーツキャンプ・合宿に訪れている。「表4」は、これまでの垂水市におけるスポーツ合宿参加者の推移をグラフにしたものである。

表4 垂水市スポーツ合宿の参加者推移表



(垂水市役所からの提供資料を基に筆者作成)

令和元年度実績では、団体数：55、滞在延人数：6413名、延人泊数：4763名となっている。着目すべきは、2011（平成23）年度まで、年間約800名程度の参加者であったのが、2012（平成24）年度より、合宿参加者の急激な増加がみられることである。そうした合宿参加者急増の背景には、「垂水市」と「サッカー競技」との関係性があげられる。とりわけ、高校サッカー界で全国大会優勝3回の実績を有する「鹿児島実業高等学校サッカー部」（以下、「鹿実サッカー部」とする）の存在が大きい。

鹿実サッカー部の監督は、森下和哉氏である。森下監督は、鹿実サッカー部OBであり、監督の出身地は「垂水市」である。前監督から森下氏へと監督のバトンが渡されたその時期、九州内の強豪校とされるチームが集まって「ジュニオールスーパーリーグ」というフェスティバルを鹿児島県内にて開催していた。しかしながら、そのフェスティバル開催のためのグラウンド確保が困難な状況になっていった。そこで、森下監督は、自身の出身地である垂水市の地域活性化や地域のサッカー普及と強化のために、「ジュニオールスーパーリーグ」を垂水市開催へと移行することを決めて、垂水市役所へ大会実施に向けた協力要請をお願いすることとなった⁴。そして、2012（平成24）年からの「ジュニオールスーパーリーグ」垂水開催に伴い、鹿実サッカー部と垂水市の連携が深まり、その影響で全国各地から多くのサッカーチームが垂水市でのフェスティバルや合宿へ参加するようになった。そして、サッカーを中心とした垂水市のスポーツ合宿が活況を示すようになった。

4 「ジュニオールスーパーリーグ」の経緯については、森下監督への対面形式での聞き取り調査による（2021年2月7日（日）、鹿実サッカー部グラウンドにて）。

そうしたなかで、垂水市もサッカー合宿誘致には全面的に協力している。とりわけ、2017（平成29）年10月に垂水中央公園内にあった陸上競技場が「たるみずスポーツランド」として天然芝グラウンドにリニューアルされたことは、サッカー合宿誘致の観点からすれば、その効果は大きいといえる。正規サイズの天然芝グラウンドを2コート確保できる会場は、大人数の選手が所属するチームが同時に合宿トレーニングをすることを可能にし、複数のチームが参加するフェスティバル開催も問題なく実施できる。また、選手にとってもクレートコートと天然芝のグラウンドでは個々のプレイ速度やクオリティの点で全く異なってくる。したがって、チーム全体の強化や選手のパフォーマンス向上には、天然芝グラウンドは不可欠であり、「たるみずスポーツランド」の環境は整備されているといえる。

また、グラウンド環境のみならず、合宿参加チームへ対する垂水市からの贈呈品も魅力的である。2021年に垂水市にて4日間の日程でサッカー合宿を行ったチームに対して、「垂水市スポーツ団体誘致実行委員会」より「薩摩黒豚（桜島美湯豚）・カンパチ（海の桜勘）・ブリ（ぶり大賞）・飲む温泉水」、垂水経済同友クラブより「薩摩黒豚（桜島美湯豚）」、「垂水市観光協会」より「垂水市観光協会商品」が贈呈された。各チームへ贈呈された食材等は、宿舎の食事にて提供される。ブランド名がつかほどの食材を用いた食事は、選手のモチベーション向上やコンディショニングづくりに最適であり、それは垂水市特有の「おもてなし」ともいえよう。原田（2020）は、「地域で開かれるスポーツイベントの本質は、開催地のファンづくりにある」と主張する。垂水市における「天然芝サッカーグラウンド」「食事」「温泉水」などは、合宿参加者を魅了する地域の資源であり、リピーター獲得の重要な要素となっていると考えられる。

②猿ヶ城溪谷森の駅たるみず（指定管理者：株式会社ディセットボンド）

垂水市におけるサッカー合宿の宿舎に「猿ヶ城溪谷森の駅たるみず」（以下、森の駅とする）がある。常設する和風コテージ2棟（天然温泉付）・洋風コテージ6棟には、約120名の宿泊が可能である。また敷地内には、オートキャンプ3区画があり、体験プログラムとして溪谷を活用したキャニオニング、シャワークライミング、マス釣り体験、バームクーヘン・ピザづくり体験、日帰りバーベキューなどが提供されている。特に夏場は、コテージやキャンプ利用者が多く、キャニオニング体験には、県外からの一般観光客も多数訪れる。表5は、これまでの森の駅でのスポーツ合宿利用者数を示したものである。近年では、年間5～6千名の利用者があり、新型コロナウイルスの影響を受けなかった2018（平成30）年度には、7328名の利用者があった。利用者増の要因には、「株式会社ディセットボンド」（以下、「ディセットボンド」とする）の存在がある。

垂水市は、2020（令和2）年7月に「垂水市猿ヶ城溪谷森の駅たるみず及び垂水市猿ヶ城活性化施設」の指定管理者を公募した。その公募に対して応募した「ディセットボンド」は、その指定管理候補者として決定され⁵、令和2年第4回垂水市市議会定例会にて審議ののち、2020（令和2）年12月に正式な指定管理者として認定された（指定期間：令和3年4月1日から令和6年3月31日）。現在は、新型コロナウイルス流行により、アウトドア活動・自然体験などが着目されるようになり、「森の駅」への来訪者に対するアクティビティ活動の充実や環境整備に努めている。大自然を活用したアクティビティ活動の充実を図ることで、来訪者の満足度を高め、そのことがリピーターの獲得や、参加者の口コミやSNS発信による新規顧客の獲得へとつながっていく。2021（令和3）年4月からの指定管理者としての「森の駅」の運営は始まったばかりであり、「ディセットボンド」には、「森の駅」の新たな魅力を発信していくことが求められている。

また、「ディセットボンド」が、「森の駅」を運営するだけでなく、「FC.KAJITSU」というサッカークラブを運営していることは特筆すべきことであろう。FC.KAJITSUは、上述した「鹿実サッカー部」

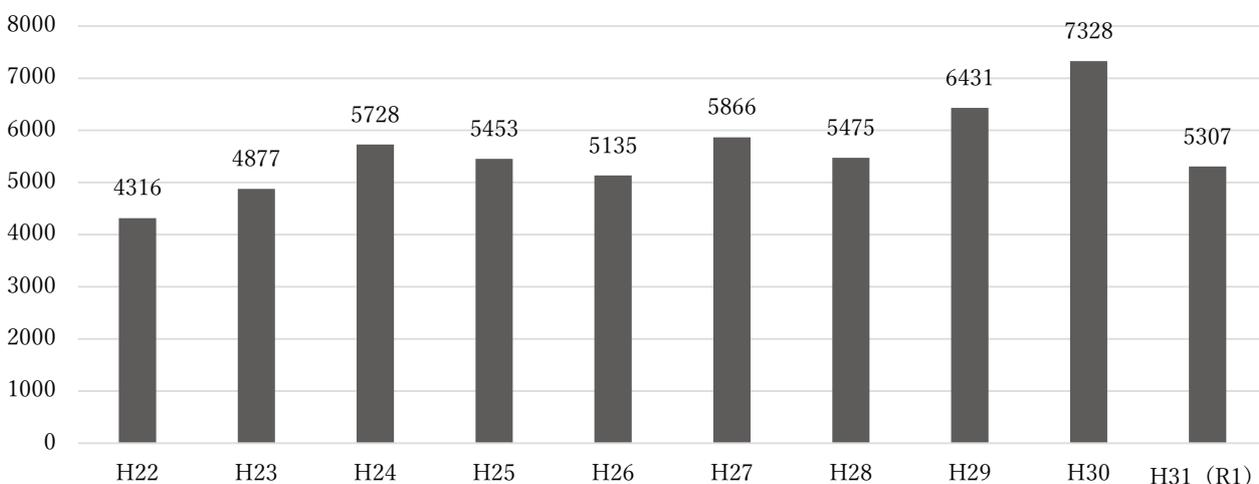
5 垂水市が2020（令和2）年10月27日、「垂水市猿ヶ城溪谷森の駅たるみず及び垂水市猿ヶ城活性化施設の指定管理者候補者の決定について」として公表した。

の下部組織として、2017（平成29）年に創設されたジュニアユース（中学生年代）を対象としたクラブである。現在までに、鹿児島県大会優勝5回、九州大会優勝1回の実績があり、2020年には全国大会出場も果たした。クラブには、7名の指導スタッフが在籍しており、選手は毎年約80名が参加するセレクションから選抜された20名程度が加入する。平日3回・週末2回のトレーニングは、約100分の時間で行われ、選手が集中できる環境のなかで実施される。活動場所は、鹿児島実業高等学校の人工芝サッカー場を利用し、鹿実サッカー部ともトレーニングマッチなどで交流する機会も多い。「森の駅」は、これまで高校サッカー部の利用が多かったが、2017（平成29）年のFC.KAJITSUの創設によって、中学年代のサッカーチームの宿泊者が増加してきたのである。

「ディセッポンド」が特徴的であるのは、公設の宿泊施設を運営するとともに、サッカークラブを運営していることである。また、そのクラブは、サッカー伝統校とされるチームの下部組織であることも強みである。伝統のあるサッカー部だからこそ県内はもちろん、全国や九州に幅広いネットワークを構築している。ゆえに、「ディセッポンド」が垂水市において大規模なサッカーイベントの開催やサッカー合宿の誘致に貢献していくことが期待される。「ディセッポンド」が「森の駅」の指定管理者となったことで、垂水市との連携は今後ますます強化されることとなろう。

「宿泊施設」と「強豪クラブ」を運営する企業が「自治体」と連携してスポーツ合宿誘致を促進させていくという形態は、スポーツツーリズムによる地域活性化の在り方について新たな可能性を示唆しているといえる。今後、垂水市におけるサッカー合宿の状況は、さらに発展していくと考えられる。

表5 森の駅たるみず宿泊数



（垂水市役所からの提供資料を基に筆者作成）

4. 結 語

本研究では、鹿児島県における2つのサッカーイベントに関する事例を調査することで、鹿児島県におけるスポーツツーリズムの実態について明らかにした。まず、「JFA 全日本 U-12 サッカー選手権大会」が鹿児島市でこれまで6大会連続で開催されて、さらに6年延長して開催されることが決定しているということから、他県にはない鹿児島の魅力的なスポーツ環境について明らかにした。次に、「垂水市のスポーツ合宿（サッカー合宿）」の実態調査から、「宿泊施設」と「クラブチーム」を運営する企業と自治体とが連携することによって、スポーツツーリズムによる地域活性化の新たな発展性について言及した。

ハイムほか（2020）は、「スポーツツーリズムの発展とは、経済成長を超えて、個人の成長と充実、

生活の質の向上、個人的および社会的幸福のさまざまな指標までが評価される進歩を意味している」と説明する。鹿児島県におけるスポーツツーリズムのさらなる発展が、スポーツ参加者と地域住民の融合による相互の関係構築をもたらし、そのことで個々の生活の質的向上が醸成されていく。スポーツツーリズムが人々の生活に大きな影響を及ぼしているのである。ゆえに、今後も鹿児島県内の各地にある潜在的資源の掘り起こし作業を進めていながら、鹿児島の魅力を再発見して、それを発信していくことが強く求められる。

謝 辞

本研究は、令和2・3年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの研究助成を受けて実施したものである。

また、鹿児島県におけるスポーツツーリズムに関する調査にあたって、鹿児島県サッカー協会事務局、垂水市水産商工観光課、株式会社ディセットボンド代表、鹿児島実業サッカー部監督をはじめ、関係する多くの皆様方のご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

文 献

- 海老塚修 (2019), 「おもてなしのスポーツ論」, 余暇ツーリズム学会編, 『「おもてなし」を考える—余暇学と観光学による多面的検討—』, 創文企画, p.93.
- 鹿児島県文化スポーツ局スポーツ振興課 (2020), 「令和元年度鹿児島県スポーツキャンプ・合宿状況調査結果」, p.1, p.5.
- 観光庁 (2020), 「ラグビーワールドカップ2019日本大会の観戦有無別 訪日外国人旅行者の消費動向」.
- 観光庁 (2011), 「スポーツツーリズム推進基本方針」.
- ジェームス・ハイアム, トム・ヒンチ (2020), 伊藤央二, 山口志郎訳, 『スポーツツーリズム入門』, 晃洋書房, p.179.
- スポーツ庁 (2017), 「第2期スポーツ基本計画」.
- 日本サッカー協会 (2017), 『JFA ブランディング概要資料』.
- 日本サッカー協会 JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会事務局 (2021), 『JFA 第44回全日本 U-12サッカー選手権大会総括報告書』, p.22.
- 原田宗彦 (2020), 『スポーツ地域マネジメント』, 学芸出版社, p.192.
- 南日本新聞, 2019年2月24日 (別冊).
- 南日本新聞, 2019年3月4日 (朝刊).
- 南日本新聞, 2019年3月12日 (朝刊).
- 村田真一 (2018), 「スポーツツーリズムと地域活性化」, 林恒宏・小倉哲也編著 『スポーツツーリズム概論』, 学術研究出版ブックウェイ, p.94.